

コミュニケーションにおける 非言語行動を含めた3機能の働きについて

近藤 富英

1. はじめに

コミュニケーション行動は、言葉と同時に他のいろいろな要素が有機的に結びつきダイナミックに行われるのが普通である。Peng (1979) は、人間のコミュニケーション行動を場面 (context of situation) の中で捉え、ある発話に意味を与えるものとして3つの機能、すなわち「言語の内在的機能 (Internal Function)」、 「言語の外来的機能 (External Function)」、 「インターシステムの機能 (Intersystemic Function)」という概念を唱えている。人間は言葉を始め、類似言語記号や身ぶり記号など、さまざまな記号 (コード) を使用するが、それらの記号はシステムという体系を構成している。すなわち、コミュニケーション行動にはそれらのシステムの関係の仕方として3つあるというのである。しかしそれらの機能も言葉を中心とする実際のコミュニケーション行動においては、互いに関連付けられながら進行している。本稿では映画の一場面を使って、それらの3つの機能、すなわちシステムの関わり方が、談話 (discourse) の中でどのように現れているか、説明を試みようとしたものである。英語教育においても、英語の文章や会話文を単なる文の集合という理解ではなく、関連付けられた文や発話が他のシステムと総合的に機能を発揮していると捉えるべきである。そのような例示により言語社会学のどの領域や研究上の知見が、英語教育に応用出来得るのかを併せて示そうとしたものである。

2. Peng の3つの機能

Peng の3つの機能とは、前項でも触れたように、言語の内在的機能、言語の外来的機能、それにインターシステムの機能のことである。言語の内在的機能とは、言葉を通して生じた意味情報とある発話との間に働く機能、すなわち談話や会話の中の文や発話の相互関係のことと言ってもよい。さらにこの言語の内在的機能は、ひとつの談話の中の発話同士を関連付ける explicit と、ある発話とその発話を含む談話の前に与えられている旧情報との間を関連付ける implicit といったふたつの面に分けられる。言語の内在的機能の具体的なことがらとしては、談話の始まり方や終わり方、トピックの展開の仕方、疑問文とその答え方、空白補充語、隣接ペア、ターン・テイクングなどを例に挙げることができる。

言語の外来的機能とは、ある発話と外来的な社会変数とを関連付けるような機能である。すなわち、年齢、性別、地域、親疎度、場面、文化的前提などといった言語外の外来的要素により、発話や発話内容が影響を受ける時に働く機能である。具体的には敬語や方言、俗語

の使用, トピックの選択, ユーモアの使用などの例があげられる。この機能をマクロ言語社会学的に捉えると, 言語政策, バイリンガリズム, 言語教育などがその例としてあげられる。

インターシステムの機能とは, 複数のシステムの間で働く機能のことで, 言語と他の伝達システム, たとえば身ぶり記号や類字言語記号との間で働く機能のことである。システムとしての正確さや種類の量や質は異なるであろうが, たとえば身ぶりやイントネーションも, それぞれ kinesic code, paralinguistic code として, システムを持っていると考え, それと言語の間の働きに注目した機能である。典型的なものとしては, 今述べたイントネーションと言語の関係, 身ぶりと言語などの関係が主なものであるが, そのほかリズムや外来語なども含んでいる。ただしこれらの3つの機能は単独で働くことはむしろ稀で, 通常は互いに関連を持ちながら相補的, 強調的, 重層的に働いているものである。

3. 場面に見る3機能の働き

本稿では上で述べた3つの機能が会話において実際はどのように現れるのものであるかを示すために, 映画の一場面を取り上げる。取り上げた映画は1997年のアメリカ映画「デビル」(The Devil's Own) からのワンシーンである。ハリソン・フォード演じるニューヨークの実直な警官トム (Tom) の家に, アイルランド青年ローリー (Rory) 役のブラッド・ピットが下宿するためにやって来る。ローリーは純朴で快活な青年であるが, 実は国際手配されたIRAのテロリストでもあった。取り上げた場面は, ローリーが紹介によりトムの家を訪れて, トムの家族たちと初めて夕御飯を食べる場面である。以下のように会話が進んでいく。Tomは警官, Shielaは彼の妻であり, 夫婦には上からBrigid (10代後半) Morgan (10代前半), Annie (5歳前後) というの3人の娘がいる。場所はトムの家の食堂である。左に説明の都合上, 行数を付加してある。

- 1 Annie: For food and clothes and all that grows. For family, too. Dear God, thank you.
- 2 I hope Rory really likes the basement because I don't.
- 3 Rory: Rory likes the basement a lot.
- 4 Shiela: May I serve you?
- 5 Rory: Aye.
- 6 Shiela: Say when.
- 7 Rory: The meat looks delicious. What is it?
- 8 Shiela: It's...it's, its cornbeef and cabbage. I thought that's all you ate over there.
- 9 Rory: Ah...no, never had it.
- 10 Tom: You've got this over there, don't you? (ビールを持って示しながら)
- 11 Rory: Aye. We do have that. Fuck, I was baptised in it.
- 12 Shiela: Have some cabbage.
- 13 Annie: You were baptised in beer?
- 14 Tom: It's a joke, honey.

(食事が進むうちに娘たちが言い合い、うるさくなる)

- 15 Tom: Girls!
16 Shiela: What part of Ireland are you from?
17 Rory: From Cookstown.
18 Tom: Where's that? Is that near Belfast?
19 Rory: Ah, it's...it's in the middle of the North. It's on the shore of Lough Neagh.
20 Morgan: Do you have a girlfriend in Ireland?
21 Tom: Come on, guys!
22 Brigid: Morgan, come on, please.
23 Rory: No.
24 Brigid: That's a kind of personal question, right?
25 Tom: Yeah, leave the guy alone. Give him a break. He just got here.
26 Morgan: You know, Brigid has a boyfriend.
27 Rory: I'm sure she does.
28 Brigid: Morgan!
29 Tom: Will you guys knock it off, please?
30 Now, Rory. Welcome to America.
31 Rory: Thanks.

簡単な日本語訳は以下のとおりである。

Annie: 食べ物と着る物そして大きくなる物すべてと、家族に対して、神様ありがとう。

そしてローリーが地下室を気に入りますように。だって私は嫌いなんですもの。

Rory: ローリーは好きになるよ。

Shiela: 少し取りますか?

Rory: はい。

Shiela: このくらい?

Rory: 肉が美味しそうだ。何ですか?

Shiela: コーンビーフとキャベツよ。お国で食べていたんじゃないか?

Rory: あ、いいえ。初めてです。

Tom: これならあるだろう? (ビールをかかげる)

Rory: はい。もちろん。その中で洗礼を受けました。

Shiela: もう少しキャベツをどう?

Annie: ビールで洗礼?

Tom: 冗談だよ。

(食事が進むうちに娘たちが言い合い、うるさくなる)

Tom: 静かに!

Shiela: アイルランドのどこ出身なの?

Rory: クックスタウンです。
 Tom: それはどこだい? ベルファーストの近く?
 Rory: いえ。北の中央部, ネイ湖の湖畔です。
 Morgan: 恋人はいるの?
 Tom: いい加減にしないで。
 Brigid: 聞いちゃ失礼よ。
 Tom: 遠慮しないで。着いたばかりなんだよ。
 Morgan: プリギッドには彼氏がいるのよ。
 Brigid: モーガン!
 Tom: いい加減にしないで。ローリー! アメリカへようこそ。
 Rory: ありがとう。

以下にこの短いクリップの中で各機能がどのように現れているかの説明を行う。

3. 1 言語の内在的機能

言語の内在的機能とは、先に触れたように言葉を通した情報とある発話との間に働く機能のことであるが、この映画のクリップの中では次のようなことがらがそれにあたる。

3. 1. 1 疑問文を中心とした隣接ペアについて

4行目の Shielia の *May I serve you?* という問いかけに Rory は次の行で *Aye* と答えている。「質問」には「答え」という隣接ペア (adjacency pair) が見られるが、隣接ペアは内在的機能の典型的なものである。このクリップには6人の人物が登場するので、時として発話が重なったり、2人のやりとりの中に他の人物が割って入ったりしているため、質問の直後にすぐ答えがくるとは限らない。たとえば、20行目で Morgan が Rory に *Do you have a girlfriend in Ireland?* と尋ねているが、Tom と Brigid のたしなめるような発話の後に、Rory はやっと *No.* と答えている。また、質問には前置きが置かれることがよくあり、7行目にその例が見られる。Rory はテーブルの上の肉の種類を尋ねるのだが、まず *The meat looks delicious.* と言ってから *What is it?* と尋ねている。それに対して Shielia はそれがコーンビーフとキャベツであると答えている。ただし、この場合は Shielia はそれで自分のターン(話す順番)から離れず、さらに *I thought that's all you ate over there.* と付け加えている。このように求められている情報のみを答えるのではなく、さらにひと言付け加えることは会話をさらに展開していくためには大切なことである。なお、Tom は18行目で Rory の出身地である Cookstown の場所を尋ねているが、以下のように訊いている。*Where's that? Is that near Belfast?* これはいわゆる open question から close-ended question に移行することにより相手を答えやすくするための配慮ともいえる。Rory もこの質問に、*Ah, it's...it's in the middle of the North. It's on the shore of Lough Neagh.* とこれまた二つの叙述文で答えている。最初に大まかに提示して、次に詳しく尋ねたり答えるのは英語のひとつの特徴でもある。

また日常の会話はとくに疑問文とその答えが多いと言うことは知られているが、もちろん

疑問文だけではなく、叙述の文の後に応答のベアの文が生じることはある。たとえば、26行目でMorganがTomに対してYou know, Brigid has a boyfriend. と言うと、Tomは、I'm sure she does. と答えている。この場合はyou knowという空白補充語が答えを促す働きをしている。このようにいろいろな工夫がなされながら会話は展開していく。

3. 1. 2 代名詞の現れ方

代名詞の使用も言語の内在的機能のひとつといえる。文と文が代名詞によって関連付けられるのである。英語では、あるものが初出の場合は名詞に不定冠詞が付けられ、二度目は定冠詞を伴い、それ以降は代名詞で言及されるのが普通である。しかし10行目においてTomは初めて言及するにもかかわらず、ビールのことを指示代名詞のthisを使って言及している。もちろんこれは、手にビールをかざしながらの場面だからである（目の前にビールというものを手にとって見せながらの発話であるので、厳密にいうとインターシステムの機能も働いていると言えよう）。それを受けて11行目のRoryはI was baptised in it.と今度は代名詞のitで応じている。さらに13行目のAnnieはYou were baptised in beer?とbeerという名詞を使っている。すなわち、実物がそばにあったり、確認しようという気持ちが大きかったりすると、通常とは逆の言及のされ方をするのである。

3. 1. 3 語の置き換え

短い談話や会話の中でも、ある語が類似の語と置き換えて使用されることがある。たとえば、Tomが娘たちに呼びかける時の呼称であるが、15行目ではGirls!となっているものが、21行目と29行目ではguysと置き換えられている。やはりこれは自由変異（free variation）というよりは、Tomの娘たちへの心理的態度や心理的な距離が変化したからだと思う。すなわち、食事中に言い合う娘たちを最初は軽くgirlsという語でたしなめたのであるが、その後でRoryに対してプライベートな質問をし始めたので、少し語調を強めguysと変化しているのである。これは語の置き換えという点だけを見れば言語の内在的機能と言えるが、心理的な距離などが影響していると見れば言語の外来的機能とも言えるものである。このように実際は3機能と言っても、同時に重層的に関連し合っているわけである。

以上、この短いクリップの中においても語や文がさまざまに関連を持ちながら使用されていることがわかる。なお、ここまでで指摘したことがらは、同一の談話内で関連付けられているので、explicitなものと言うことができる。

3. 1. 4 トピックの展開の仕方

トピックの種類を見ると、最初は「お祈り」で始まり、その後「地下室」、「食事」、「ビール」、「洗礼」、「生まれ故郷の名前」、「ガールフレンド」、そして最後に「挨拶」という順番になっている。上のトピックの種類を選択そのもの、すなわちどのようなトピックが取り上げられているかについては、言語の外来的機能と関係するが、内在的機能と言ったときにはトピックの始まり方や展開の仕方に注目する。

最初の「地下室」のトピックは、AnnieがI hope Rory likes the basement...と始まっているが、これは「お祈り」の一部として始まったので、上記のような形をとっているが、他

のトピックはすべて疑問文か付加疑問文でトピックの最初が示されている。すなわち *May I serve you?* (「食事」のトピック), *You've got this over there, don't you?* (「ビール」のトピック), *What part of Ireland are you from?* (「出身地」のトピック), *Do you have a girlfriend in Ireland?* (「ガールフレンド」のトピック) などである。最後に Tom が *Now, Rory. Welcome to America.* と言いながら改めて歓迎する意志を示しながら、同時に会話の終結を告げているのである。なお、初対面の影響だと思われるが、Rory 以外の人物が質問して、Rory が答えるという、Q (質問)→A (答え), Q→A, Q→A のパターンが現れている。

3. 2. 言語の外来的機能

言語の外来的機能とは、言語外の社会的要素と発話との作用に関係する機能であったが、本稿で取り上げた場面の中にもいろいろな要素が作用している。まず最初に Annie のお祈りの場面が出てくるが、欧米のキリスト教文化では、食事の前に「いただきます」の代わりに神への感謝の言葉を述べる人が多いようである。

また会ったばかりで親疎度が少ないため、全体としてやや消極的な印象を与える一方的な Q→A, Q→A, Q→A の談話構造になっている。

11行目で Rory が *I was baptised in it.* とユーモアで受け応えているが、これはユーモアのセンスを大事なコミュニケーションのための資質と考えている文化の影響とも言える。また 4 行目で Shiela が *May I serve you?* と I を主語にして相手に食事を勧めているが、日本語だったら、「(あなたは) いかがですか?」となるであろう。

14行目では、Tom がいわゆる親愛語とも言われる *honey* と言う言葉を使い、愛情の念を表している。*fuck* や *guy(s)* といった俗語も使用され、全体的には中流家庭の雰囲気が見られる。また日本と同じように食事時には大いに話していい文化であることもわかるが、20行目で Morgan が Rory の恋人のことを尋ねた時には、プライベートな質問として Tom と Brigid からたしなめられている。このようにその文化の「規則」(この場合は初対面時は恋人の話題はふさわしくない) からはずれると修正されるのである。

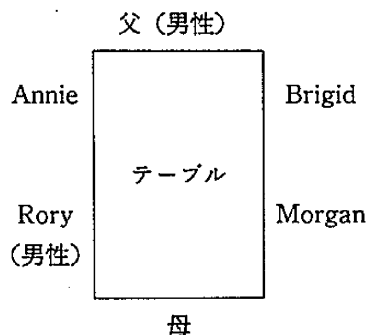
トピックの選択面からいうと、今述べた「恋人」の話題は別として、「出身地」や「食事の印象」などアメリカにおける初対面時にふさわしいものが選ばれているようである。このあたりは日本と大差が無いと言えよう。ただし日本だったら「家族」や「学校」のことも話題として選択されることが多いと思われる。とにかく外来的な要素に影響を受けて会話が展開していることがわかる。

3. 3 インターシステムの機能

インターシステムの機能とは、言語と他のシステムとの間に働く機能のことであった。類似言語を含めた非言語行動との関係が代表的なものである。場面に現れた主なものとしては次のようなものが観察された。(1)お祈りの場面では全員が下を向いている。(2)お祈りの直後、Tom は Annie の頭を軽くなでている。(3) Shiela は *May I serve you?* と言いながら顔を Rory に向けて視線を合わせている。(4) Rory に *The meat looks delicious.* と言われた Shiela は Rory の方に顔を向ける。(5)話しかける時は視線を相手に向ける。(6) *Welcome to*

America.と言いながら Tom は Rory にビールの入ったグラスをかかげる。疑問文の場合、英語としては当然ではあるが、語尾を上げることによってターン（話す順番）を相手に譲ることが出来る。すなわち「私の言いたいことは終わり」というわけである。

着席の順番は以下に示すような座り方で、父親と母親が両端に座り、最年少の Annie は父親の隣で、全体的には女性と男性がほぼ交互になるような座り方である。



4. さいごに

以上見てきたように、コミュニケーション行動には、言語の内在的機能、言語の外来的機能、インターシステムの機能といった3つの機能が有機的に結びついてダイナミックに行われていることがわかった。今回述べたことは言語社会学の知見の中でも英語教育に利用可能なことがらであり、創造的で効果的なコミュニケーションのためにも、シラバス上でのこれらの積極的な応用が期待される。

参考文献

Peng, Fred C.C. 1979 「言語社会学」, 『英語教育と関連科学 (現代の英語教育 Vol.2)』, 研究社出版.